長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第30集

大谷第１遺跡

一般県道国分箱崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１９

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第30集

大谷第１遺跡

一般県道国分箱崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

写真１　礫集中部検出状況（東から）

写真２　貿易陶磁器・緑釉陶器

刊行にあたって

本書は、一般県道国分箱崎線道路改良工事に伴い平成29年度に実施した、大谷第１遺跡の発掘調査報告書です。

壱岐島は律令下では一国として扱われ、壱岐国府と壱岐国分寺（嶋分寺）が置かれました。壱岐国府の場所は確定していませんが、壱岐国分寺は壱岐氏居館とともに現在の壱岐市芦辺町、國片主神社付近にあったことが分かっています。今回調査を行った大谷第１遺跡は壱岐国分寺跡・壱岐氏居館跡に近接しています。調査では、調査面積は小規模ながら、礫集中部と炉跡が見つかり、人々の営為痕跡が確認されました。また、古代を中心に多くの遺物が出土し、国分寺跡との関係をうかがうことのできる成果となりました。

この発掘調査にあたって、壱岐振興局関係各課をはじめ、ご協力いただいた多くの関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

また、本書が文化財保護ならびに地域の歴史を理解するための資料として役立てていただければ幸いです。

平成31年３月25日

長崎県教育委員会教育長
池　松　誠　二

例　　言

1．本書は、一般県道国分箱崎線道路改良工事に伴い実施した大谷第１遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は一般県道国分箱崎線道路改良工事に伴う大谷第１遺跡発掘調査報告書作成費にもとづいて発行した。

3．本事業は長崎県壱岐振興局建設課が事業主体となり、発掘調査主体は長崎県教育委員会が、発掘調査は長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センターが担当した。発掘調査の長崎県遺跡調査番号はOTN201714である。

4．平面直角座標系は世界測地系を、方位は座標北を用いている。

5．発掘調査に係る現地指導、情報・資料提供など以下の方々にご指導・ご協力をいただいた（敬称略、所属順）。

河合恭典（壱岐市立一支国博物館）、田中聡一・松見裕二（壱岐市教育委員会文化財課）、川畑敏則（長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所）、安樂勉（株式会社オリエントアイエヌジー）、月読神社

6．本書に収録した遺物の実測及び製図は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。

7．本書収録の遺物・図面・写真類は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。

8．本書に掲載した地形分類図は国土調査による『５万分の１土地分類基本調査（地形分類図）「勝本」長崎県（1978）』を使用し作成したものである。

引用元 URL：国土交通省国土政策局国土情報課ウェブサイト

http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/ZOOMA/4214/index.html

9．本書に掲載した周辺遺跡分布図は国土地理院コンテンツの標準地図及び傾斜量図タイルを使用し加工して作成したものである。

引用元 URL：国土地理院ウェブサイト

https://maps.gsi.go.jp/#14/33.774296/129.751110/&base=std&ls=std%7Cslopemap%2C0.49&blend=0&disp=11&lcd=slopemap&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0f1&d=vl

10. 本書の執筆・編集は山梨が行った。

本 文 目 次

Ⅰ．遺跡の環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……2
Ⅱ．調査に至る経緯……4
　1．調査に至る経緯……4
　2．範囲確認調査……4
　　⑴　調査期間と面積
　　⑵　調査体制
　　⑶　範囲確認調査の概要
Ⅲ．調査の概要……5
　1．調査期間と面積……5
　2．調査体制……5
　3．調査の経過……5
　4．基本層序……5
　5．調査の概要……6
　6．整理作業の経過……6
Ⅳ．遺構と遺物……9
　1．遺構……9
　　⑴　礫集中部
　　⑵　炉跡
　　⑶　ピット
　2．遺物……10
　　⑴　包含層出土遺物
　　⑵　その他の遺物
Ⅴ．総括……14

図　目　次

図1　壱岐島の位置と地形分類図……1
図2　壱岐島内の古墳時代～中世主要遺跡位置図……3
図3　周辺遺跡分布図（S＝1/15000）……3
図4　基本土層断面図（S＝1/60）……7
図5　調査区平面図（S＝1/60）……8
図6　礫集中部出土遺物（S＝1/3）……9
図7　炉跡平・断面図（S＝1/20）……9
図8　ピット平面図（S＝1/30）……10
図9　包含層出土遺物（S＝1/3）……11
図10　その他の出土遺物（S＝1/3）……12

表　目　次

表1　周辺遺跡一覧……2
表2　遺構一覧……13
表3　出土遺物一覧……13

写 真 目 次

【巻頭図版】
巻頭図版1
　写真1　礫集中部検出状況
　写真2　貿易陶磁器・緑釉陶器
【写真図版】
写真図版1
　写真3　範囲確認調査トレンチ土層断面
　写真4　遺構検出状況
　写真5　調査区北壁土層断面
写真図版2
　写真6　A-A’土層断面
　写真7　B-B’土層断面
　写真8　調査区完掘
写真図版3
　写真9　重機掘削状況
　写真10　SL01検出状況
　写真11　SL01土層断面
　写真12　SP01土層断面

写真13　SP02土層断面
写真14　SP03土層断面
写真15　SP04土層断面
写真16　SP05土層断面
写真図版 4
写真17　SP01完掘状況
写真18　SP02完掘状況
写真19　SP03完掘状況
写真20　SP04完掘状況
写真21　SP05完掘状況
写真22　SS01検出状況
写真23　遺跡遠景
写真24　作業状況
写真図版 5
写真25　礫集中部出土遺物
写真26　包含層出土遺物(1)
写真図版 6
写真27　包含層出土遺物(2)
写真図版 7
写真28　包含層出土遺物(3)
写真29　その他の出土遺物(1)
写真図版 8
写真30　その他の出土遺物(2)
写真31　包含層出土遺物

Ⅰ．遺跡の環境

1．地理的環境

壱岐島は玄界灘に浮かぶ南北17km、東西15kmほどの島で、福岡県博多港から約76km、佐賀県呼子から約26km、対馬市厳原から約76kmの距離にあり、古くから対馬島とともに大陸から日本列島への中継点としての役割を果たしてきた。

島の地質は下位より砂岩・頁岩からなる勝本層群、砂岩・泥岩・火山岩・凝灰岩・珪藻土からなる壱岐層群、玄武岩・安山岩・流紋岩・砂礫層からなる芦辺層群、玄武岩・安山岩からなる郷ノ浦層群に分けられる（壱岐団体研究会1973）。勝本層群は浮遊性有孔虫化石層序から始新世に形成されたとされ、また壱岐層群より上位の地層の形成年代は火山岩類の噴出時期から中新世以降と考えられる。これらの火山岩類は玄武岩を主体として低平な溶岩台地を形成している。また、台地上には高尾山・津ノ上山・御津ノ辻・鹿ノ辻・岳ノ辻・久美ノ尾などのスコリア丘が点在している（長岡2005）。

地形としては島のほとんど全域が溶岩台地であり、島内最高点は岳ノ辻山頂で標高212mを測る。全体的に対馬に比べて標高が低くなだらかだが、詳細に見ていくと溶岩台地の侵食による細かな起伏が多くある。河川流域や海岸部には谷底平野や沖積地が形成され、なかでも島内最長の河川である幡鉾川下流域に広がる「深江田原」と呼ばれる平野は県内第２位の広さを持ち、水田耕作や麦の栽培が盛んに行われている。

調査地は島の中央付近の溶岩台地上に位置する。標高は約90mを測り、東へ向かって下る緩傾斜地となっている。周辺は宅地や田畑、山林となっており、調査地点は工事前には畑として使用されていた。

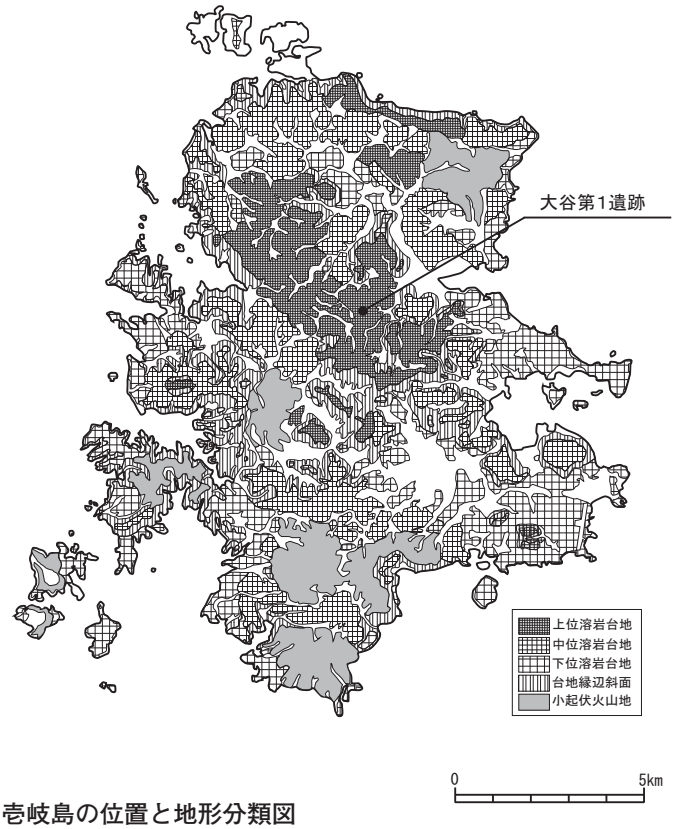


図１　壱岐島の位置と地形分類図
（『５万分の１土地分類基本調査（地形分類図）「勝本」長崎県（1978）』をもとに作成）

2．歴史的環境

壱岐島内には旧石器時代以来の遺跡が確認されているものの、旧石器時代、縄文時代の遺跡は少数であり、遺跡数が増加するのは弥生時代前期後葉以降となる。中でも深江田原に位置する原の辻遺跡は発掘調査により船着き場跡や多重環濠が確認され、遺物も弥生土器や木製品・金属製品のほか多くの大陸系遺物が出土しており、その規模や内容から魏志倭人伝に記載された一支国の王都であることが確実になった。原の辻遺跡の集落は４世紀前半には解体されるが、その後古墳の築造が始まるのは５世紀後半を待たねばならず、この間の壱岐島の状況には不明な点も多い。

壱岐島内では現在265基の古墳が確認されており、長崎県内の古墳の半数が壱岐に集中している。最も古い古墳は深江田原を見下ろす丘陵上に位置する大塚山古墳で、竪穴系横口式石室を有する円墳である。古墳の数が増加するのは６世紀後半からで、島中央部の台地上に大型の前方後円墳や円墳、群集墳が次々と築造された。特に県内最大の前方後円墳である双六古墳と、同じく前方後円墳の対馬塚古墳、大型円墳である兵瀬古墳、笹塚古墳、鬼の窟古墳、掛木古墳の計６基は壱岐古墳群として国史跡に指定されている。いずれも規模だけでなく副葬品の内容も豊かで質が高く、壱岐がヤマト王権にとって重要な地であったことが窺える。

律令期になると壱岐は一国として扱われ、壱岐国府と国分寺が置かれた。壱岐国府の場所は特定されていないが、古墳の集中する芦辺町国分地区や深江田原に隣接する芦辺町湯岳興触地区などが候補として上げられている。国分寺については地方豪族である壱岐直氏の氏寺を国分寺にあて、「嶋分寺」と呼ばれていたことが延喜式に記されている。壱岐国分寺の所在地は、地元の研究者である山口麻太郎氏により古文献や字図、礎石の存在から芦辺町国分地区の国片主神社周辺に比定されており、隣接して壱岐氏居館跡がある。国分寺跡からは平城宮跡と同笵の軒丸瓦が出土しており、古墳時代から引き続き、朝廷との強いつながりがあったことが分かる。

一方で大陸と日本を結ぶ中継地という性格から交流拠点と同時に防衛上の要地でもあった壱岐には、白村江の戦いの後に対馬などとともに烽火と防人が置かれ、国防の前線基地という役割が与えられた。中世の壱岐はその性格がより強くなる。古代末には女真族による「刀伊の入寇」、鎌倉時代には文永の役、弘安の役の二度にわたる元寇により大きな被害を受け、逆に中世末期になると豊臣秀吉の朝鮮出兵の際の兵站基地として島の北端に勝本城が築かれた。

以上のように壱岐はその地理的特性から、時代ごとの情勢により交流拠点、国防拠点とその性格を変えつつも、対外交流の舞台としてその存在感を示してきたといえよう。

表１　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	大谷第１遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生時代～古墳時代	17	大塚山古墳	古墳	丘陵	古墳時代
2	大谷第２遺跡	遺物包含地	台地	弥生時代～古墳時代	18	原の辻遺跡	遺物包含地	台地	旧石器時代、弥生時代
3	大谷第３遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文時代～古墳時代、中世	19	大宝遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器時代、古代～中世
4	壱岐国分寺跡	社寺跡	台地	古代	20	椿遺跡	遺物包含地	台地	縄文時代、古墳時代
5	壱岐氏居館跡	城館跡	台地	古代	21	中尾遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文時代～弥生時代、古代
6	串山ミルメ浦遺跡	遺物包含地	砂浜	縄文時代～古代	22	浜田遺跡	遺物包含地	平野	弥生時代、古代
7	勝本城跡	城館跡	丘陵	中世	23	釜蓋古墳群	古墳	台地	古墳時代
8	掛木古墳	古墳	丘陵	古墳時代	24	百田頭古墳群	古墳	台地	古墳時代
9	笹塚古墳	古墳	丘陵	古墳時代	25	山ノ神古墳群	古墳	台地	古墳時代
10	対馬塚古墳	古墳	丘陵	古墳時代	26	京塚山古墳群	古墳	台地	古墳時代
11	双六古墳	古墳	丘陵	古墳時代	27	カジヤバ古墳	古墳	台地	古墳時代
12	鬼の窟古墳	古墳	台地	古墳時代	28	館遺跡	遺物包含地	台地	古墳時代～古代
13	兵瀬古墳	古墳	丘陵	古墳時代	29	郡城跡	城館跡	丘陵	中世、近世
14	大清水池遺跡	遺物包含地	池	古墳時代～古代	30	月読神社前遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生時代～中世
15	覩城跡	遺物包含地	丘陵	弥生時代～古墳時代、中世	31	鶴翔城跡	城館跡	丘陵	中世
16	興触遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器時代～古墳時代	32	原遺跡	遺物包含地	丘陵	古代

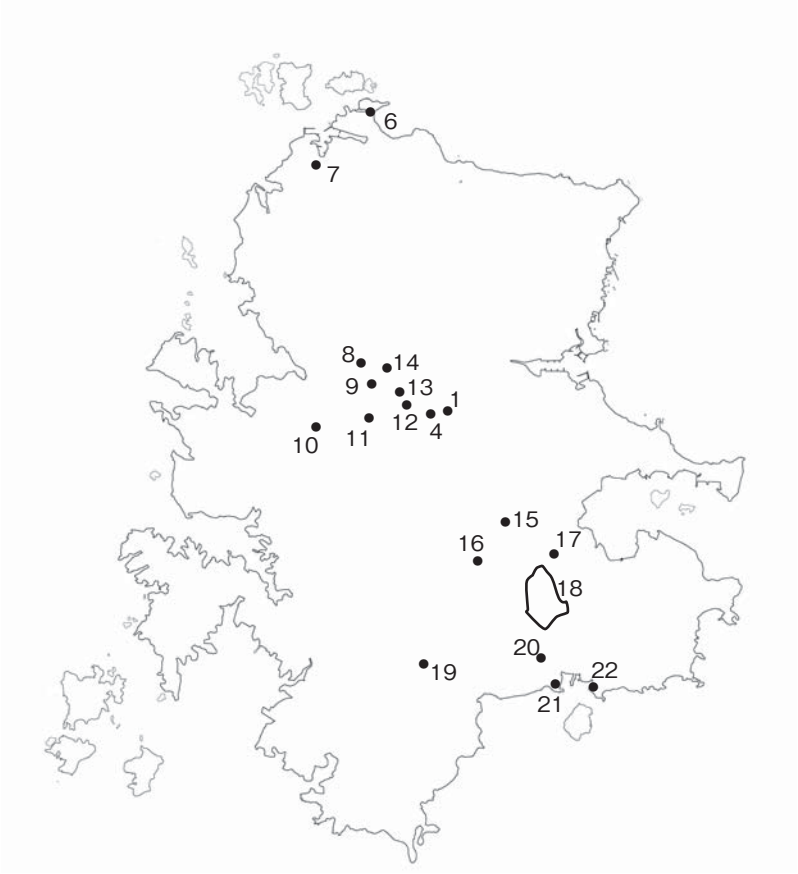


図２　壱岐島内の古墳時代～中世主要遺跡位置図

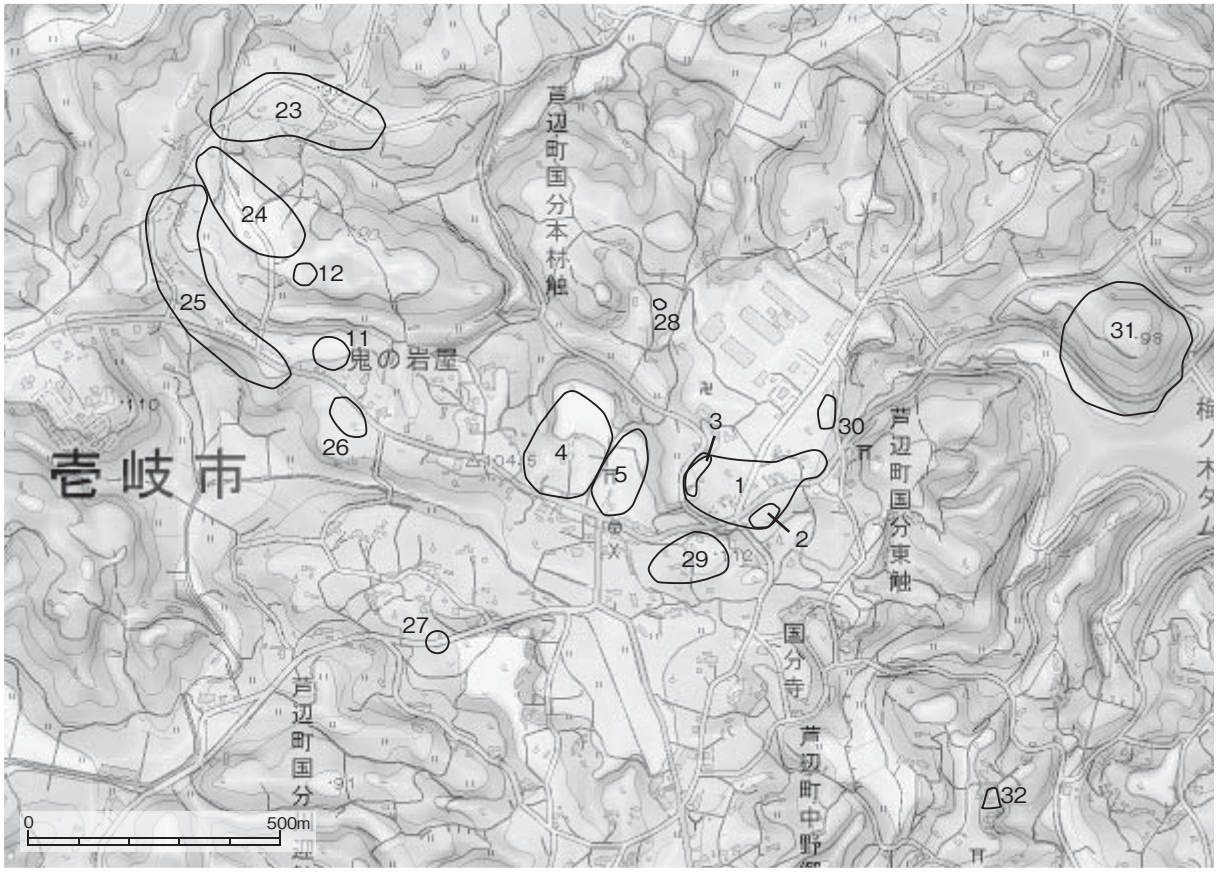


図３　周辺遺跡分布図（S＝1/15000）
標準地図及び傾斜量図（国土地理院）をもとに作成

Ⅱ．調査に至る経緯

１．調査に至る経緯

壱岐島の中央部を東西に走る一般県道国分箱崎線（県道172号線）は、県道174号線を介して国道382号線と芦辺港をつなぐ幹線道路である。平成29年度に芦辺町国分東触地内のカーブ部分について、道路改良工事が行われることとなった。工事は現況道路の拡張を伴っており、開始にあたり平成29年10月18日に長崎県埋蔵文化財センターが現地を確認した。その結果、工事対象地は大谷第１遺跡内にあたっていたため、急遽範囲確認調査を実施することとなった。

２．範囲確認調査

⑴　調査期間と面積

期間：平成29年10月25日（水）～平成29年10月26日（木）

面積：1.26㎡

⑵　調査体制

調査担当機関	長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター	
調査担当者	主任文化財保護主事	山梨千晶
	文化財保護主事	宮木貴史
	文化財調査員	千原和己

⑶　範囲確認調査の概要

①調査方法

工事対象地の西側は既に風化岩盤が露出する状況であったため、岩盤上の堆積が残る範囲に0.8m×0.9mと0.6m×0.9mの小規模な調査坑２箇所を設定し人力で掘削した。また、対象地北側の削平を受けていた法面の精査を行った。

②層序

１層　暗褐色（10YR3/4）粘質土。しまり強い、粘性やや強い。風化礫、橙色土ブロック含む。

２層　暗褐色（10YR3/4）粘質土。しまり強い、粘性やや強い。５mm大の風化礫多く含む。

③調査の結果

調査坑の規模が小さかったことから遺構は確認できなかったが、２ヶ所の調査坑から合わせて約60点の遺物が出土した。出土遺物は摩滅した土師質土器と須恵器の小片だったが、調査面積に対して出土量が多く、また工事対象地内で複数の遺物が表採されたことから、包含層が残存している可能性が高いと考えられた。この結果を受け、長崎県埋蔵文化財センターと事業者である壱岐振興局建設課で協議を行った。協議では、風化岩盤が露出しておらず土の堆積が残る工事対象地東側の35㎡について本調査を実施すること、工事の予定から本調査は平成29年度内に実施すること、報告書は平成30年度刊行となることを確認した。

Ⅲ．調査の概要

１．調査期間と面積

期間：　平成30年２月28日（水）～平成30年３月27日（火）

面積：　35㎡

２．調査体制

長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター

所長	岩永正弘
総務課長	田川正明
調査課長	川道　寛
調査課　主任文化財保護主事	山梨千晶

３．調査の経過

調査は２月28日から開始した。工事の準備に伴い耕作土は既に掘削されていたため、耕作土掘削時の重機による踏み込みの可能性が考えられる表面30cm ほどをバックホウで掘削した。３月５日から作業員12名を雇用して堆積状況確認のためのトレンチ掘削、包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行い、並行して図化、写真撮影等の記録作業を行った。事業課への確認の際に調査終了後の埋め戻しは不要であるとの回答を得ていたため、３月27日に土のうとブルーシートによる現場養生をして作業を終了した。

以下は本調査の日誌抄録である。

平成30年２月28日　重機掘削実施。
３月５日　作業員雇用開始。
３月６日　調査区南端にトレンチ（南トレンチ）設定、掘削。
３月７日　南トレンチで地山検出。GL-150cm 程度。地山より20cm ほど上で青磁片出土。焼土（炉跡）確認。調査区北端にトレンチ（北トレンチ）設定。
３月９日　北トレンチで礫集中部確認。調査区西端で風化岩盤検出。
３月12日　礫集中部の全体像を確認するため調査区全体の包含層掘削を開始する。
３月14日　礫集中部南側の地山上でピット検出。
３月16日　礫集中部断ち割り。風化岩盤まで掘削し、礫集中部下部の堆積状況を確認。
３月27日　現場養生、撤収作業完了。

４．基本層序

調査区南辺は畑として使われていた際に石垣が構築されており撹乱が見られたため、調査区北壁を基本土層断面としている。

１層から４層は、分層時に地山ブロックや風化礫の含み具合により細分したが、土質に大きな差異

はなく、由来は同一のものと考えられる。

1層　暗褐色（10YR3/4～3/3）粘質土　しまり強い　粘性やや強い

0.5cm 大～ 3 cm の風化礫を多く、礫をまばらに含む。地山ブロックを含む。

2層　暗褐色（10YR3/3）粘質土　しまり強い　粘性強い

0.5～ 1 cm の風化礫を密に、2 ～ 5 cm の風化礫・礫をまばらに含む。遺物出土量多い。

3層　暗褐色（10YR3/3）粘質土　しまり強い　粘性強い

0.5～ 1 cm の風化礫を多く、2 ～ 5 cm の風化礫・礫をまばらに含む。遺物出土量多い。

4層　暗褐色（10YR3/3～3/4）粘質土　しまり強い　粘性強い

0.5～ 3 cm の風化礫・礫を含む。礫よりも下位の層。遺物を極少量含む。

5層　褐色（10YR4/6）粘質土　しまり強い　粘性非常に強い

0.5～ 1 cm の風化礫を多く、3 ～10cm の礫・風化礫をまれに含む。無遺物層。

粘土化した風化岩盤と考えられる。

6層　褐色（10YR4/6）粘質土　しまり強い　粘性強い

風化礫を多く含む。5 層より粘土化の度合いが弱く、表面を削ると風化礫のような感触が強い。

7層　褐色（10YR4/6）粘質土混じり灰色（10YR5/1）風化岩盤

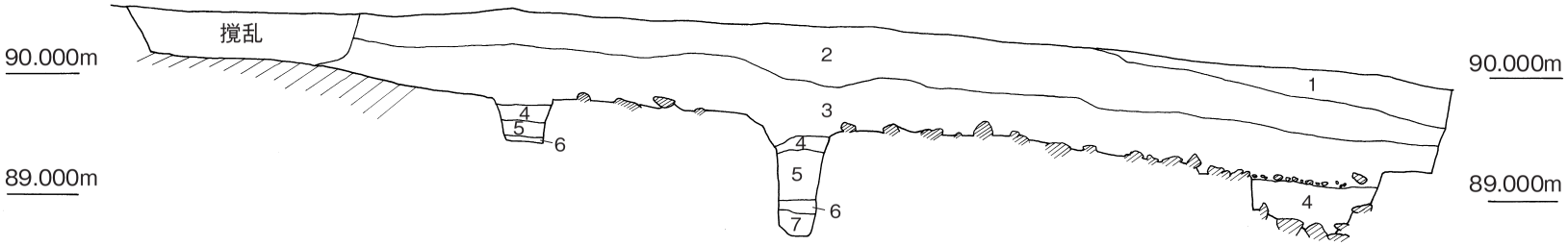
5．調査の概要

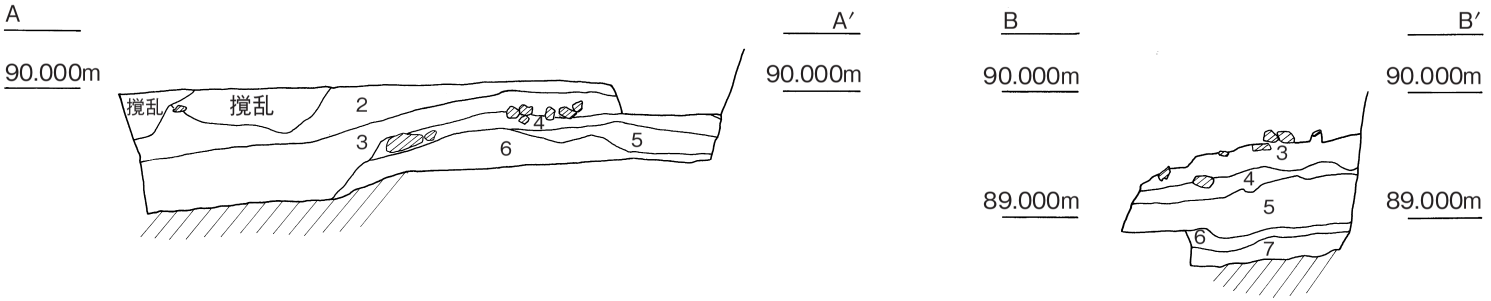
遺構は礫集中部、炉跡、ピットなど 7 基を確認した。炉跡とピットの検出面は 5 層上面に対応するものと考えられる。調査期間が短かったため、礫集中部は 2 箇所に断ち割りを設定し礫下部の状況を確認したが、10cm 程度の暗褐色土（ 4 層）を挟み地山が検出された。また、調査区北端や西南端に設定したトレンチでは、風化岩盤が調査区北西角付近から東及び南に向かって急激に落ち込む状況を確認した。風化岩盤の傾斜から調査地の南側及び東側が谷などの侵食地形であった可能性がある。

遺物は礫集中部として取り上げたもの以外は、調査時に土層の区分が難しかったためすべて暗褐色土出土として取り上げた。土師器片、須恵器片が多いが、陶磁器や石鍋片も出土している。土師器の摩滅が著しく、図化できたものは須恵器、陶磁器が多い。調査中には地山付近で須恵器（短頸壺）と高台付土師器碗が、それよりも上位で陶磁器片が出土するなど、出土レベルによって遺物の新旧が分けられる状況とは考えにくい。また多くが小片であり摩滅も顕著であることから、遺物は周辺からの流れ込みと考えられる。時代が判別できる遺物は古代のものが多いが、わずかに古墳時代の可能性がある須恵器が出土している。

6．整理作業の経過

平成30年11月から平成31年 3 月にかけて埋蔵文化財センターで実施し、遺物の水洗、接合、ID 番号付与、実測、遺物・現場実測図トレースの流れで作業を行った。報告書作成後の遺物は長崎県埋蔵文化財センターで保管している。





1層　暗褐色（10YR3/4～3/3）粘質土　しまり強い　粘性やや強い　0.5cm大～3cmの風化礫を多く、礫をまばらに含む。地山ブロックを含む。
2層　暗褐色（10YR3/3）粘質土　しまり強い　粘性強い　0.5～1cmの風化礫を密に、2～5cmの風化礫・礫をまばらに含む。遺物出土量多い。
3層　暗褐色（10YR3/3）粘質土　しまり強い　粘性強い　0.5～1cmの風化礫を多く、2～5cmの風化礫・礫をまばらに含む。遺物出土量多い。
4層　暗褐色（10YR3/3～3/4）粘質土　しまり強い　粘性強い　0.5～3cmの風化礫・礫を含む。礫よりも下位の層。遺物を極少量含む。
5層　褐色（10YR4/6）粘質土　しまり強い　粘性非常に強い
　0.5～1cmの風化礫を多く、3～10cmの礫・風化礫をまれに含む。無遺物層。粘土化した風化岩盤と考えられる。
6層　褐色（10YR4/6）粘質土　しまり強い　粘性強い　風化礫を多く含む。5層より粘土化の度合いが弱く、表面を削ると風化礫のような感触が強い。
7層　褐色（10YR4/6）粘質土混じり灰色（10YR5/1）風化岩盤

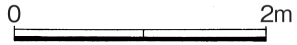


図4　基本土層断面図（S＝1/60）

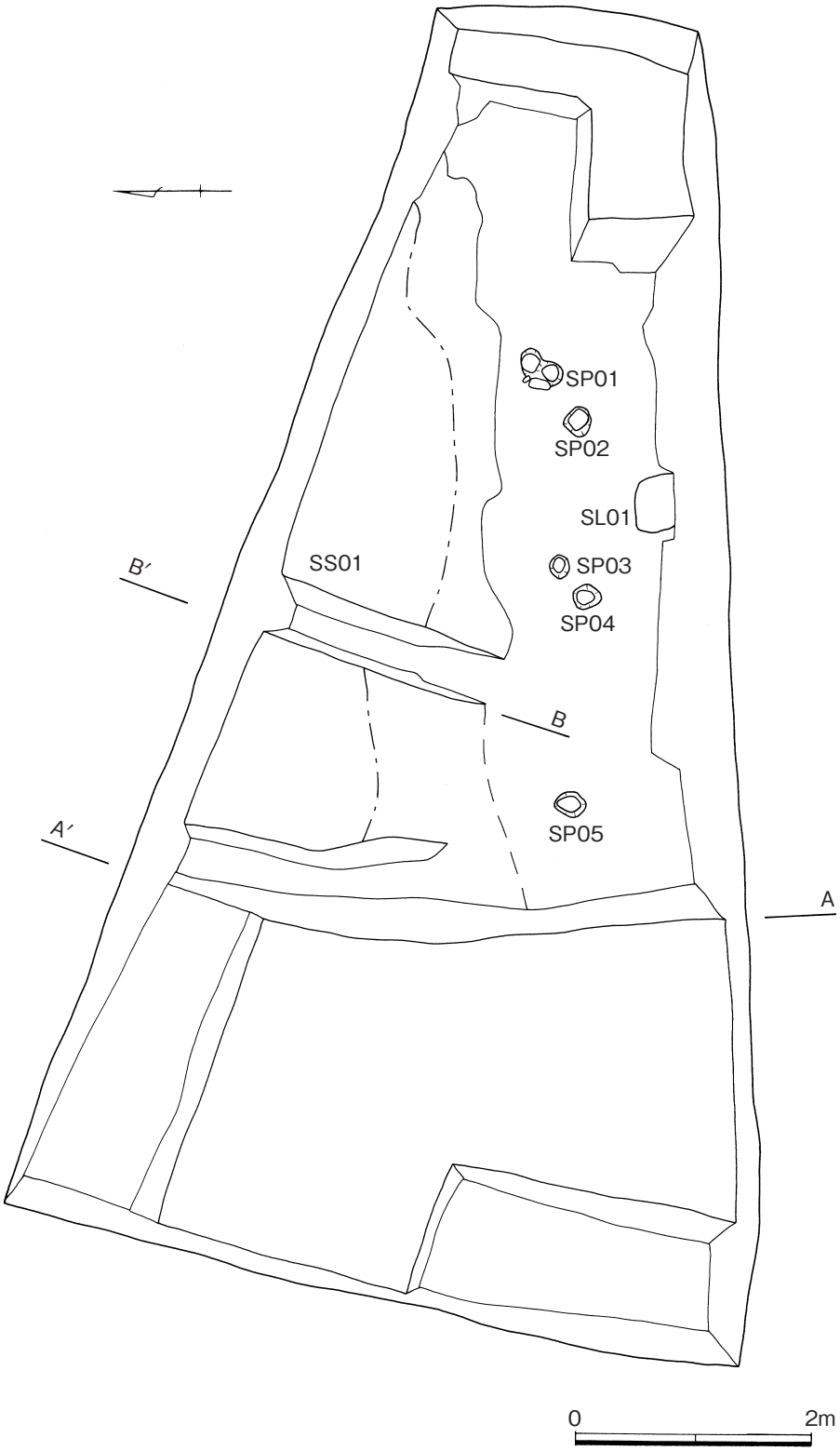


図５　調査区平面図（S＝１/60）

Ⅳ．遺構と遺物

１．遺構

⑴　礫集中部（SS01）

調査区北半に位置し、拳大を中心に最大20cmほどの亜円～亜角礫が平面的に分布している。調査区内では南北約２m、東西約７mを測る。調査区北壁周辺では平坦面となっているが、礫の平面をそろえている様子は見られない。また、南側は傾斜し、一部の礫が転落している状況が見られた。端部に根固め石などは確認できなかった。礫は調査区外に続いており、平坦面の検出状況から中心は調査区外にあるものと考えられる。遺構の性格と年代は不明であるが、礫上部を覆う包含層からは古代から古代末までの遺物が出土しており、古代末以前の遺構である可能性が高い。

調査中には礫直上・礫中から出土した遺物を礫集中部出土遺物として取り上げたが、摩滅の状態も包含層出土遺物と似ており、礫上の包含層に伴う遺物であった可能性がある。１は土師器、２・３は須恵器で、器形は不明だが甕の口縁部かと考えられる。４は土錘で、端部の一部が摩滅している。

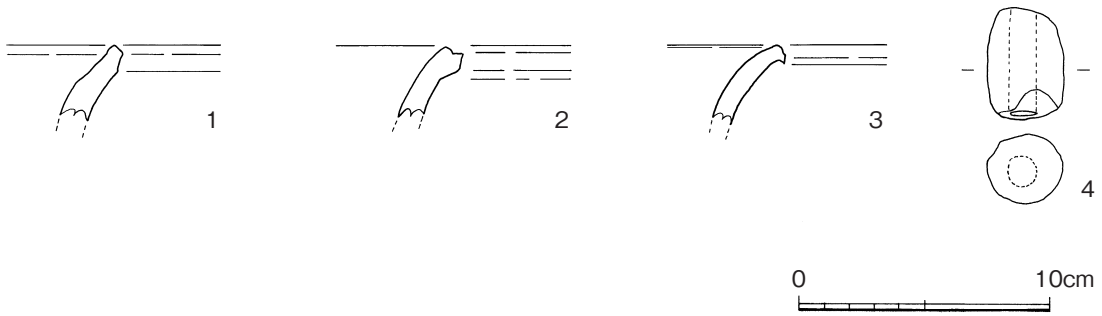


図６　礫集中部出土遺物（S＝１/３）

⑵　炉跡（SL01）

調査区南端に位置し、一部は調査区外に延びる。径約50cmで縁辺部が中心部に比べ強く被熱する。遺物は出土していないが、遺構上の堆積土層が礫集中部上部のものと同一層であり、同じく古代末以前の遺構である可能性が高い。礫集中部との関係は不明だが炉跡検出面に礫集中部から転落したと見られる礫があることから並存していた可能性がある。

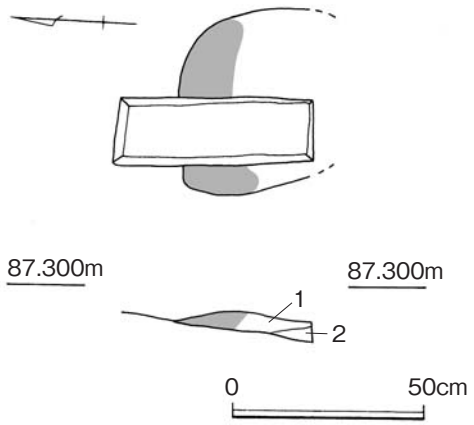


図７　炉跡平・断面図（S＝１/20）

⑶　ピット

調査区南半で５基のピット（SP01～SP05）を検出した。直径は20～40cm程、深さ10～20cmを測る。SP01、03、05ないしはSP02、04、05の組み合わせで並ぶようにも見え、位置関係から炉跡に関連するものである可能

性がある。遺物はSP01とSP03から土師器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。いずれのピットも包含層に類似する暗褐色土で埋まっており、礫集中部、炉跡と同様の時期の遺構と考えられる。

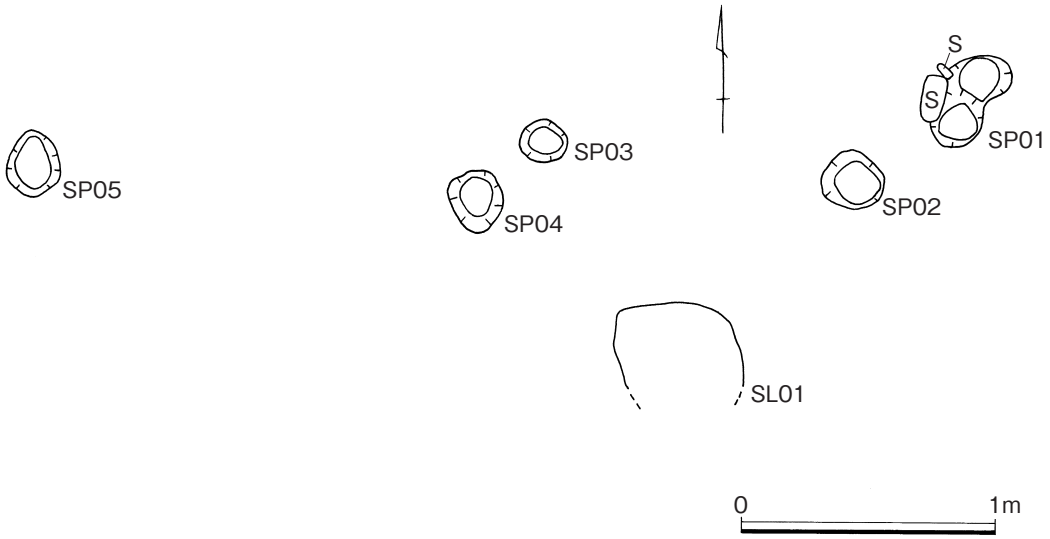


図8　ピット平面図（S＝1/30）

2．遺物

(1)　包含層出土遺物

5～8は高台を有する坏身で、高台は低く外側への張り出しは弱い。体部が残るものは外方に直線的に開いている。底部はほぼ平坦で、高台が端部より内側に付く。9・10は高台を持たない坏身である。9は体部がほとんど残っていないものの10とは開き方に差が見られる。11は須恵器の皿で底部と体部が明瞭に分かれ、体部はやや外反しながら開く。12～14は須恵器の蓋で器高が低く、12・14は扁平なつまみを有する。天井部にはヘラケズリが見られ、口縁部が残る13は端部を丸く収めている。坏身・蓋ともに形状から牛頸窯跡群のⅦA期からⅧ期に相当し、8紀前半から9世紀前半頃のものと考えられる。15・16は短頸壺の口縁部である。15は小型で口縁部がやや内傾する。16は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。いずれも肩部は胴部上位にあるものと考えられる。17は甕の口縁部と考えられる。口縁を楕円形に肥厚させ、肥厚部の下半に太い沈線を施す。坏よりも古い時期のものである可能性がある。18は口縁部片である。色調は焼き締め陶器のように見えるが焼成不良の須恵器の可能性がある。19～21は黒色土器A類の碗で、摩滅が著しく内外とも調整は不明瞭である。19の高台は他の2点に比べて高く薄い。20・21は高台が低く、20は底部と体部の境でわずかに屈曲する様子がみられる。全体形や調整が不明であることから詳細な時期決定はできないが、出土遺物中に黒色土器B類が少ないことから山本信夫氏による大宰府土器編年Ⅸ期以前の資料である可能性が高い。22は甑の取手である。小型で先端が強く屈曲する。23～25は越州窯系青磁碗である。23・25はⅡ類で、23は底部が円盤状高台でわずかに上げ底状になる。いずれも外面体部下半が露胎し、見込には目跡が見られる。24はⅠ類で、全面施釉後に畳付の釉を掻き取っている。畳付に目跡が見られる。26～28は緑釉陶器である。26は円盤状高台の碗で、底部の切り離しは右回転の糸切りである。畿内（京都）系と考えられる。27

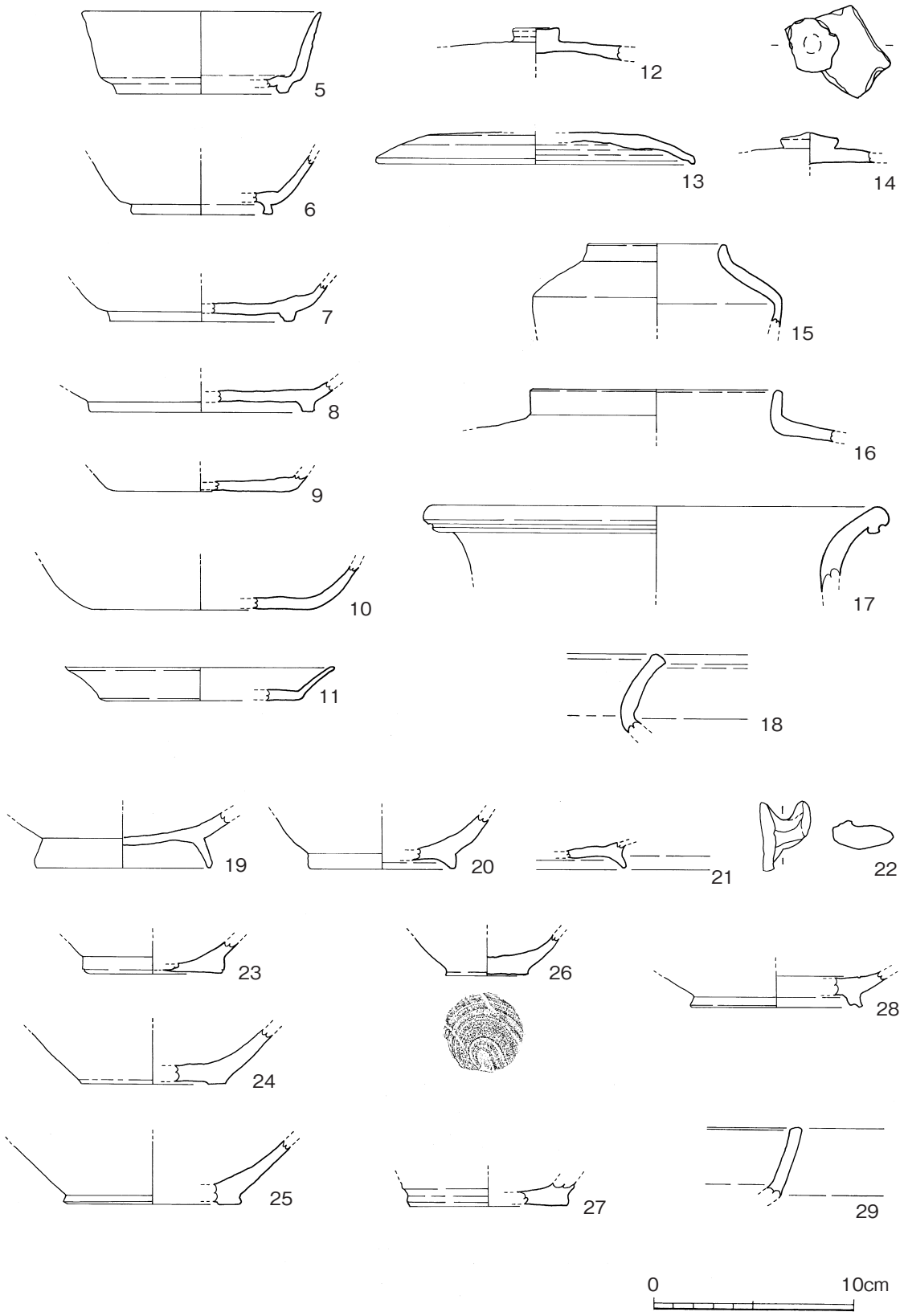


図９　包含層出土遺物（S＝１／３）

は底部破片である。胎土は軟質で釉が一部剥落している。外面の底部から体部の境に段を有する。京都系と考えられる。28は高台を有し、内面の底部と体部の境に沈線を施す。見込にヘラ描きの文様があるが、破片のため詳細は不明である。有段輪高台であることから近江産で10世紀後半の資料と考えられる。29は陶器の口縁部片である。破面で屈曲する様子が見られ、器形は皿になるものと考えられる。

(2) その他の遺物

30～32は須恵器の蓋である。30は器高が高く、天井部を平坦にする。他の蓋に比べると径はやや小さい。全形は明らかでないが、天井部の形状から牛頸窯跡群Ⅳ B 期からⅤ期に相当し、6世紀末から7世紀前半頃の所産であると考えられる。31・32は器高が低く、口縁端部の形状から31は牛頸窯跡群Ⅷ期、32は牛頸窯跡群Ⅶ B 期の資料である。33・34は高台を有する坏身で、いずれも高台の特徴から包含層出土の高台付き坏身と同様に牛頸窯跡群Ⅶ A 期からⅧ期の資料と考えられる。35は須恵器で頸部から口縁部の破片資料である。頸部はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部の下に2条の沈線が施される。平瓶の頸部である可能性がある。36は須恵器の底部片である。器壁は厚く底部中央に向かって上げ底状になっており、瓶子の底部と考えられる。37は底部糸切りの土師器で、坏身と考えられるが底部が厚く、別の器種になる可能性もある。調査区壁面清掃中に出土したため包含層出土と確定できない。他の遺物と時期が大きく異なるが、調査区に近接して中～近世の城館である郡城跡があり、関連する可能性がある。38は甑の取手で、上半が欠損している。39は越州窯系青磁Ⅰ類の碗で、畳付に目跡が残る。40は陶器の口縁部と考えられるが、自然釉の付着した須恵器である可能性もある。

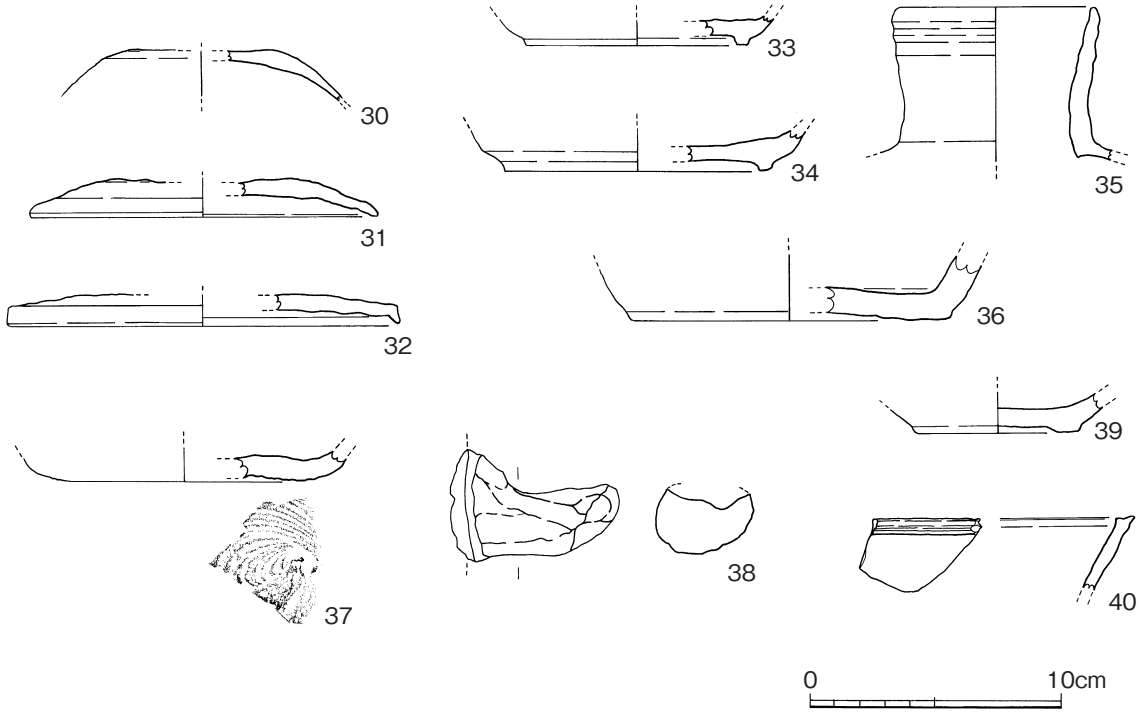


図10　その他の出土遺物（S＝1／3）

表２　遺構一覧

遺構番号	法量(cm) 直径	法量(cm) 深さ		埋土	遺物	備考
SS01						礫集中部
SL01	46		1	にぶい赤褐色（５YR4/4）粘質土しまり強・粘性やや強風化礫含む　一部暗赤褐～明赤褐色（2.5YR3/4－5/6）		
			2	にぶい赤褐色（５YR４／４）粘質土しまり・粘性強風化礫含む		
SP01	41	21	1	暗褐～褐色（10YR3/4－4/6）粘質土しまり・粘性強い風化礫含む	土師質土器片	
			2	暗褐色（10YR3/3）粘質土しまり・粘性強い風化礫まれに含む		
SP02	25	10	1	暗褐色（10YR3/4）粘質土しまり・粘性強い風化礫・礫まれに含む		
SP03	19	14	1	暗褐色（10YR3/3）粘質土しまり・粘性強い風化礫まばらに含む	土師質土器片	
SP04	24	17	1	暗褐色（10YR3/3）粘質土しまり・粘性強い風化礫含む		
SP05	26	12	1	暗褐色（10YR3/3－3/4）粘質土しまり・粘性強い風化礫まばらに含む		調査中 SP６ （SP５欠番のため振替）

表３　出土遺物一覧

掲載番号	ID	出土層位	器種	部位	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 底径	色調 外	色調 内	調整 外	調整 内	備考
1	012	SS01	土師器甕？	口縁部	—	残3.1	—	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	ヨコナデ	ヨコナデ	
2	014	SS01	須恵器甕？	口縁部	—	残2.9	—	オリーブ黒 7.5Y3/1	灰5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
3	015	SS01	須恵器甕？	口縁部	—	残3.3	—	黒2.5Y2/1	黄灰2.5Y4/1	回転ナデ	回転ナデ	
4	016	SS01	土錘		長4.6	幅3.1	高2.9	橙7.5YR7/6－浅黄橙10YR8/4				
5	019	北 Tr 暗褐色土	須恵器坏身	底部	復12.0	4.1	復8.6	灰5Y5/1	灰5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
6	080	暗褐色土	須恵器坏身	底部	—	残3.0	復7.0	青灰5B5/1	青灰5B5/1	ナデ	ナデ	
7	048	暗褐色土	須恵器坏身	底部	—	残1.9	復9.2	灰白 10YR8/1－7/1	灰白2.5Y7/1	ナデ、ケズリ	回転ナデ	
8	054	暗褐色土	須恵器坏身	底部	—	残1.5	復11.2	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y7/1	ナデ	ナデ	
9	071	暗褐色土	須恵器坏身	底部	—	残0.8	復9.0	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	ナデ、回転ナデ	ヘラ切り	
10	064	北 Tr 暗褐色土	須恵器坏身	底部	—	残2.2	復11.2	黄灰2.5Y6/1	灰5Y6/1	回転ヘラケズリ	回転ナデ	
11	041	北 Tr 暗褐色土	須恵器坏身	口縁～底部	復13.4	1.7	復10.0	灰 N6/0	灰 N6/0	ナデ	ナデ	
12	101	暗褐色土	須恵器蓋	つまみ～天井	—	残1.6	—	灰白10Y7/1	灰10Y6/1	ケズリ	ナデ	
13	040	北 Tr 暗褐色土	須恵器蓋	口縁～天井	復16.0	残1.6	—	灰 N6/0	灰 N6/0	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	
14	072	暗褐色土	須恵器蓋	つまみ～天井	—	残1.6	—	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2	ナデ	ナデ	
15	097	暗褐色土	須恵器短頸壺	口縁～肩部	復6.8	残4.2	—	灰 10Y5/1～N5/0	灰 N5/0	ナデ	ナデ	
16	046	暗褐色土	須恵器短頸壺	口縁～肩部	復12.6	残2.6	—	灰5Y6/1	灰5Y5/1	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	
17	076	暗褐色土	須恵器甕？	口縁部	復22.4	残4.3	—	浅黄2.5Y7/3	浅黄2.5Y7/3	ナデ	ナデ	
18	021	北 Tr 暗褐色土	須恵器？甕	口縁部	—	残4.0	—	にぶい赤褐 5YR4/3	灰褐5YR4/2	ナデ	ナデ	
19	100	暗褐色土	黒色土器碗	底部	—	残2.8	復8.6	橙5YR6/8	黒10YR2/1			黒色土器Ａ類
20	099	暗褐色土	黒色土器碗	底部	—	残2.7	復7.4	橙2.5YR6/8－明赤褐5YR5/6	灰褐7.5YR5/2			黒色土器Ａ類
21	020	北 Tr 暗褐色土	黒色土器碗	底部	—	残1.3	—	橙5YR6/6	黒褐10YR3/1		ナデ、指頭？	黒色土器Ａ類
22	060	暗褐色土	甑	取手	長2.5	幅3.0	高3.4	灰白5Y8/1～8/2				
23	070	暗褐色土	青磁碗	底部	—	残1.6	復6.8	にぶい黄2.5Y6/3	にぶい黄2.5Y6/4			越州窯Ⅱ類
24	050	暗褐色土	青磁碗	底部	—	残2.7	復7.2	黄褐2.5Y5/3	黄褐2.5Y5/3			越州窯Ⅰ類
25	036	北 Tr 暗褐色土	青磁碗	底部	—	残3.2	復8.6	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4			越州窯Ⅱ類
26	017	北 Tr 暗褐色土	緑釉陶器碗	底部	—	残2.1	4.6	灰白7.5Y7/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	畿内（京都）系
27	035	暗褐色土	緑釉陶器碗？	底部	—	残1.2	復8.0	浅黄2.5Y7/4	オリーブ黄 7.5Y6/3			京都系
28	093	暗褐色土	緑釉陶器碗	底部	—	残1.8	復8.6					近江産
29	078	暗褐色土	陶器皿？	口縁	—	残3.6	—	暗灰黄2.5Y4/2	黄灰2.5Y5/1			
30	033	南 Tr	須恵器蓋	天井部	—	残2.0	—	灰5Y6/1－4/1	灰5Y5/1	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、指頭	
31	009	整形中	須恵器蓋	口縁～天井	復14.0	残1.6		灰 N5/0	灰 N5/0	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	天井部手持ちヘラケズリ
32	011	整形中	須恵器蓋	口縁部	復15.8	残1.5	—	灰白10Y7/1	灰白10Y8/1	ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	
33	034	南 Tr	須恵器坏身	底部	—	残1.6	復10.6	灰2.5Y6/1－4/1	灰7.5Y6/1	ナデ	ナデ	
34	013	排土中	須恵器坏身	底部	—	残1.1	復9.0	浅黄2.5Y7/3	灰黄2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	
35	010	整形中	須恵器平瓶？	口縁～頸部	復8.1	残6.1	—	灰7.5Y5/1	灰5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
36	028	南 Tr	須恵器瓶子	底部	—	残2.6	復12.8	灰5Y6/1	灰5Y6/1	ヘラケズリ	回転ナデ	底部ヘラ切り
37	008	整形中	土師器坏身	底部		残1.2	復10.6	橙5Y6/6－褐灰5YR4/1		ナデ	ナデ	底部糸切
38	005	清掃中	甑	取手	長6.8	幅4.0	高4.5	橙5YR6/8－浅黄橙10YR8/4				
39	030	南 Tr	青磁碗	底部	—	残1.6	復6.6	黄褐2.5Y5/3	黄褐2.5Y5/3			越州窯Ⅰ類
40	006	清掃中	陶器碗	口縁部	—	残3.0	—	黄褐2.5Y5/3	黄褐2.5Y5/3	回転ナデ	回転ナデ	須恵器？

Ⅴ．総括

今回の調査では古代を中心とした遺物が出土し、礫集中部や炉跡が確認された。礫集中部、炉跡はいずれも調査区外に続くもので、調査では性格も含めその全容を把握することはできなかった。一方で遺物は土師器、須恵器を中心に出土している。35㎡という面積に対して出土量は多いが、その多くは小片で摩滅が著しいため図化できる資料は少数であり、出土状況とあわせて周辺からの流れ込みであると判断した。須恵器は古墳時代と考えられる資料も少数含まれるものの、８世紀前半から９世紀前半のものが主体となると考えられる。黒色土器は詳細な時期は不明ながらも、確認できるものはほぼＡ類でありＢ類と思われるものは少ない。山本信夫氏による大宰府土器編年では黒色土器Ｂ類はⅨ期から増加することから、それ以前のものである可能性が高い。Ⅳ・Ⅴ期～Ⅸ期の標識磁器である越州窯系青磁Ⅰ・Ⅱ類が出土していること、緑釉陶器も近江産については10世紀後半の年代を与えられることからも、包含層の時期は８世紀から10世紀と考えられる。

遺物の内容で特に目を引くのは緑釉陶器を含めた陶磁器である。陶磁器の中には越州窯産の貿易陶磁器も含まれており、付近に緑釉陶器や貿易陶磁器を入手できる上位階層の居住域の存在が想定される。８～10世紀にこのような陶磁器を入手できたものとして可能性が高いのは壱岐国分寺あるいは壱岐直氏である。調査地点は壱岐国分寺跡・壱岐氏居館跡と500m 程度の距離にあり、国分寺あるいは壱岐直氏に関連する施設が調査地周辺にも存在した可能性が高い。

【参考・引用文献】

壱岐団体研究会1973「壱岐島の地質―とくに中新統壱岐層群について―」『地質学論集』９，69-81頁，日本地質学会

長岡信治2005「原の辻遺跡周辺の地形地質」『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所文化財調査報告書第30集，長崎県教育委員会

舟山良一・石川健編『牛頸窯跡群―総括報告書Ⅰ―』大野城市文化財調査報告書第77集，大野城市教育委員会

高橋照彦1995「緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編257-278頁，真陽社

山本信夫1996「北部九州の土器」『日本土器辞典』742-746頁，雄山閣

山本信夫2000『大宰府条坊跡ＸＶ』太宰府市教育委員会

写真３　範囲確認調査トレンチ土層断面（南から）

写真４　遺構検出状況（西から）

写真５　調査区北壁土層断面（南東から）

写真６　A-A’ 土層断面（東から）

写真７　B-B’ 土層断面（東から）

写真８　調査区完掘（北東から）

写真 9　重機掘削状況（東から）

写真 10　SL01 検出状況（北から）

写真 11　SL01 土層断面（西から）

写真 12　SP01 土層断面（東から）

写真 13　SP02 土層断面（南から）

写真 14　SP03 土層断面（南から）

写真 15　SP04 土層断面（東から）

写真 16　SP05 土層断面（東から）

写真 17　SP01 完掘状況（東から）

写真 18　SP02 完掘状況（南から）

写真 19　SP03 完掘状況（南から）

写真 20　SP04 完掘状況（東から）

写真 21　SP05 完掘状況（東から）

写真 22　SS01 検出状況（南西から）

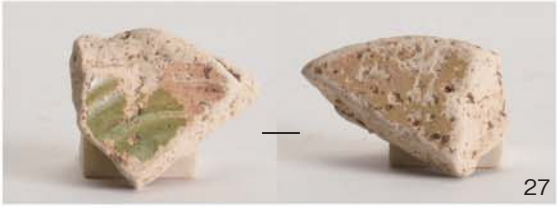
写真 23　遺跡遠景（南東から）

写真 24　作業状況（南東から）

写真 25　礫集中部出土遺物

写真 26　包含層出土遺物（1）

写真 27　包含層出土遺物（2）



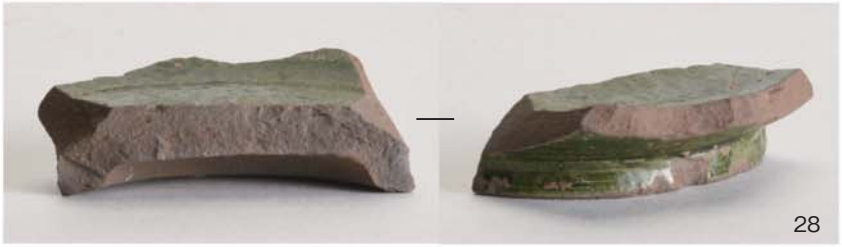


写真 28　包含層出土遺物（3）

写真 29　その他の出土遺物（1）

写真 30　その他の出土遺物（2）

写真 31　包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおたにだい１いせき
書名	大谷第１遺跡
副書名	一般県道国分箱崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	山梨千晶
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515-１　TEL0920（45）4080
発行年月日	西暦2019年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	遺跡コード 市町	遺跡コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
大谷第１遺跡（おおたにだいいせき）	長崎県壱岐市（ながさきけんいきし） 芦辺町国分東触（あしべちょうこくぶひがしふれ）	42210	16－232	33°47′58″	129°43′23″	2018.02.28 ～ 2018.03.27	35㎡	道路

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大谷第１遺跡	遺物包含地	古代	礫集中部・炉跡・ピット	土師器・須恵器・緑釉陶器・陶磁器・石鍋・砥石	

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第30集

大谷第１遺跡

2019（平成31）年３月25日

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市尾上町３番１号

印刷　有限会社　正文社印刷所